

# 中国古代コト属楽器札記

## ——出土楽器と既存古楽器に関する調査報告の読み方——

吉川良和

昨年「漢代琴楽と孔子学鼓琴疑義」を著わした後、聊かの反響があった<sup>(1)</sup>。ただ、当該論文にとって楽器各部位の数値的報告が大きな比重を占めていたけれども、紙幅の関係で具体的な資料の内容を逐一示せず措いていた。そこで、ここに諸報告書に散見する様々な情報を蒐集整理し、煩を厭わず列挙して参考に供したいと思う。と同時に、次の課題とすべき先秦弦鳴楽器で最も重要であった瑟の探索への基礎としたい。

中国では、近年「音楽考古学」というジャンルが生まれ、出土した音楽に関する文物の研究が急速に進んで大きな成果を上げている。しかし、楽器が出土しても、報告者が必ずしも当該楽器に精通していないことも往々あって、重要な部位の計量を怠ったり数値が欠落したりしている場合がある。同時に、折角数値が表示されていても、その出土楽器が具有している情報を読み取ることができなくてはならない。それには、当該楽器の機能に習熟している必要がある。

さて、上掲の論文では、中国の代表的な弦鳴楽器である琴を扱った。琴は西洋の近代楽器分類法では long-zither 属に入るが、中国では遥か昔から最も重要な楽器の一つであった。しかも中国で、紀元前の出土弦鳴楽器は、この属以外確認されていない。また、漢代以前の long-zither 属は5種を数え、その総称がない。そこで、本札記では、わが国の long-zither 属の総称である「コト属」と言う呼称を用いる。中国古代のコト属は、瑟、琴、箏、筑、臥箏篋の五種が文献に出てくる。この中で、臥箏篋は寝かせたハープで、筑は五弦の有柱（ブリッジ）打奏楽器である。前者は不明なところがあり実物が確定されていないが、後者は湖南長沙王前漢墓から現物が発見されたとの報告が出ている<sup>(2)</sup>。箏は文献で秦朝に初めて出現したコトとされ、早期の箏は筑に似て五弦で紀元後に瑟と類似するようになると、後漢の応劭撰『風俗通義・声音』には言う。だから、前漢以前の箏は筑と過渡期において、極めて類似し判別しにくい。そこで、本札記では主に先秦の代表的コト属楽器・瑟と琴を中心に出土楽器の調査報告を記し、併せてその数値や報告書から楽器学的に一体なことを読みとるべきか述べてみたい。

弦鳴楽器の弱点は音量の微弱さにある。そこで、弦鳴を増幅する共鳴箱が必要となる。弦は普通腐食してなくなっているため、その共鳴箱のみが遺存する場合が多い（早期のものには底板のみの場合もある）。但しそれはただの箱でなく、それにはまず弦を通す「弦孔」があ

る。そこから、弦数、孔間の距離（弦距）が判明し、弦孔径から弦の太さが推定できる。さらに、コト類で特徴的なのは、コト面に弦をそのまま張ると弦がコト面に触れて震動しないから、弦を浮かせるために木を渡して固定し凸型を形成する「岳」（日本では「駒」と呼ぶ）が付いているのである。手弾する方の岳は「首岳」（箏の「龍角」）、弦を結ぶ方は「尾岳」（箏の「雲角」と呼ばれる）。瑟は先秦典籍に「二十五弦」とあるから<sup>(3)</sup>、弦孔が25孔なら標準型の「瑟」となる。出土瑟は圧倒的に先秦楚国の領域から発掘されるので、「楚瑟」と称され、その最大の特徴は尾岳が手前から内、中、外の三岳に分かれており、中岳が首岳より最も離れていることである。実際に振動する弦長を「隠間」と呼ぶが、したがって開放弦なら中尾岳までの隠間が最も長く、馬王堆漢墓の瑟から、内尾岳までの隠間と外尾岳までの隠間は同じで、さらに柱の置かれていた位置から、内外両尾岳の音域が同じであるところから、左右の指で同音を（音量の増幅のため）同時に弾いていたろうことが推断されている<sup>(4)</sup>。弦を張るときは、首岳外の弦孔の下で留められた弦を上に出し、首岳にのせて尾岳に渡してのせ、尾岳の外側の弦孔から一旦箱中に入れて尾端から上にあげて折り曲げて戻し、上の尾部に備え付けられた柄（糸巻）に結びつける。調弦は各弦ほぼ等しくてよく、張られた弦を柱ののせて弦長を分割し音高を定める。

琴は全表面に黒漆を塗って柱を立てないと言うのが一般的特徴である。弦を張るときは、首岳外の弦孔の下にある軫（琴底板端の音締）に通して一旦留めておき、弦孔より上に出して首岳の上のせ龍齧（琴面の末端でやや低くなっていて、ここに弦をのせて琴底板に折りまげ雁足に巻きつける）に渡す。それから下に折り曲げ底板に沿って戻ってきて雁足に縛りつける。柱がないので、予め例えばドレミソラドレと言った音階調弦をしておかねばならない。さらに、軫を捻って音高の最終確定をする。早期の琴面は凹凸があって（柱を立てなかった証拠であり琴と瑟の根本的な差異）、左手指法を使用する意識が欠落していたことが分かる。したがって、開放弦のみの右手指法しかなかったと思われる。そこで、弦数が必然的に多くなる。目下出土琴を見ると、時代が下るにしたがって、10弦から7弦へと減少している。これは、徐々に左手指法が用いられて一弦から多音が出るようになったためであろう。但し、典籍中の琴は5弦から7弦へと増加したと述べている<sup>(5)</sup>。

それでは、以上のようなことも含め、コト類が出土した場合に、各部位の数値（単位は全てcm）がどのような情報を我々に語りかけているかを以下箇条書きにしてみよう。

- ①弦孔の数と大きさ——弦の数が判明する。大小に規則性があれば、弦の太さに差があったことを暗示する。
- ②全長——長ければ共鳴箱が大きいから音が響くが高音を得にくいし、弦を張るのに力が必要である。ただ、弦楽器は「弦歌」として歌の伴奏楽器であったので低音を求めたとも考えられる。
- ③隠間の長さ（首岳から柱、柱がなければ尾岳まで）——所謂「有効長さ」。振動する弦の長さで音高を決定する。各弦の隠間から、調弦法、音域を知ることができる。隠間が短ければ高音が取れるが、共鳴箱も小さくなり音量は小さいし、柱間が短くなるので小柱しか立てら

れず、少し移動しただけでかなりの音高差ができ調弦に不便である。隠間が長ければ、半音より狭い音も楽に取れるので正確な音程を取りやすいが、弦を強く張らないと響かず、弦が伸びて音高が下がるので厄介である。

④共鳴箱——瑟類は瑟長、瑟高と瑟幅で共鳴箱の大きさを知ることができる。首幅と尾幅にさほどの差がなく、長方形を成している場合が多い。これに対して、漢代以前の古代琴は共鳴箱に魚の尾のような尾部が付いていて、隠間を長くしている。あるいは、歌の音高に合わせるのに低音域が必要であったためかも知れない。この尾部は中が空洞でない。後世の琴は全体が細長くなって空洞になっている。古代琴は共鳴箱と言っても底板に被せてあり、取り外せる。それは軫が箱の中にあるため開けて音高調節をしなければならないからである。ただ、箱型になっているから、弹奏に力が入っても安定感がある。後世、首部の高度を狭めて軫を外に出したため枕を当てなければならなくなったが、軫の操作はしやすくなった。

⑤岳山の高さ——首岳が高いと、弾く指に力が入り大きな音が出せる。低いと、すぐに琴面に指がついてしまい力が入らないから爪弾きに限られる。他方、左指で弦を琴面に押さえて音を取る後世の琴類では、尾岳が低いほど弦と面が近いから左手の運指に便利である。ギターで分かるように、首岳は高く尾岳は低い方が演奏用には有利である。また、岳が斜めについている場合は、ハープの原理の応用で少しでも音高差をつけようとする工夫である。

⑥尾岳の背後——楚瑟は首岳からきた弦を尾岳にのせ、すぐ尾岳の外側の弦孔に通し共鳴箱の中に一旦入れる。そして背面から尾端で表面にあげて折り返し柄に巻きつける。かく複雑にしているのは、瑟類は弦長が長いので緩みやすいから角々で角度をつけ滑らないようにしているのである。琴類は、首岳から尾岳に渡して直接尾端で背面に折り返して、雁足（初期は1本、後世は2本）に巻きつける。

⑦弦間距離（弦孔距離でみる）——弦間が狭いと、隣接する弦に指の腹が触れて力が入らないので触れない爪弾き奏法（アル・アライレ）に限られるし、柱が立てにくい。複数弦間が接近して組みになり次の組との弦間に間隔があいていると、各組の複数弦が同音である可能性が高い。ただし、古代中国の弦鳴楽器で出土した例はまだない。

⑧弦の太さ（弦が発見されなければ、弦孔の大ききでみる）——同じ弦長と張力でも、弦が細いと高い音が得られる。低音で音量を上げたいければ太い弦を強く張る。馬王堆漢墓から0.1cmを超える太い弦が出たと報告されているが、それが「纏弦」が否かは記されていない。纏弦とは、燃った芯の糸にさらに細い糸を巻きつけて太くしたものである。こうすれば、同じ太さの撚り糸と同様の効果が得られる。正倉院所蔵の唐琴琴弦には纏弦が使用されている。琴のような柱を立てないコト類楽器には弦の太さに差をつけなければ、調弦は難しい。コト類は先秦中国で、五音音階調弦を基本にしていたから、小さな軫の音締だけではそれほどの音高差を付けられないからである。

⑨柱の高さ——瑟箏類では高いと張力が増し、より大きく高い音を得られ、しかも共鳴箱に音を伝える音量が増加する。さらに柱の背後で弦を押して音を得られ（「押手」と言う）、中間音を得られる。但し、これには切れにくい強い弦が必要。首岳高に比べ柱高が余り高くないと音の増幅と言うよりも、弦分割によって柱を立てている意識が見られる。芸術性が高く

なれば柱は首岳よりかなり高くなる。因みに日本の俗箏は、首岳高 1.3、柱高 5.6 であるが、先秦瑟の首岳高は普通 1.0 以下で、柱高は 1.3~せいぜい 3.1 である。紀元後、箏が出現したときに態々「危柱」と箏の柱を呼んだのは、柱が瑟柱と異なり高くなったからだろう。因みに 21 弦上海製箏の首岳高は 1.7 で、柱高は 4.7~6.1 柱足幅 1.4~2.0。

⑩柱の位置（多くは柱がすでに琴面を離れているので分かりにくいですが、柱の痕跡でも位置が確認可能な場合がある）——これで調弦法がほぼ推測できる。

⑪柱底辺の幅——弦の張度と無縁でなく、広ければそれだけ安定しており強く張っていたと推測できる。

⑫コト面の平板——平板でなければ、開放弦のみで演奏したことを示す。平板なら、柱が立てられることも示すが、漆を塗った場合は滑らかで柱は立てにくく、琴面を指板として押さえたり滑らせたりして、一弦から自由にしかも広い音域の音を取ることができる。

⑬コトの反り——これには側面の反りと、正面の反りがある。側面の反りは、岳山の弧形と関係があり各弦の段差ができて弾奏がしやすく、打弦にも擦弦にも便利である。正面の反りは柱の張力を強め響きをよくする働きがある。

⑭柄と雁足の高さの数——柄は茸型をしており瑟弦の末端を結びつけるもので尾岳の後ろ、瑟表面の端にある。雁足の方は琴弦の末端を結びつける物で、琴の底板につけた足である。ともに、高さが高ければ太い弦を使用していた可能性を示している。それは細い弦が切れやすいので太くしている場合と、低音をよく響かせるために太くしている場合がある。柄と雁足の数が多いと、太い弦を巻けるのと、ひとつの柄やひとつの雁足に巻く弦が少なくなるので、弦を交換したり、緩んだ一弦を取り出して張り直すのに便利である。瑟柄は四柄（1 柄に各 6 弦か 7 弦）、漢代以前の雁足は 1 足（7~10 弦）、唐代には 2 足（各 4 弦と 3 弦）である。

⑮弾套——わが国の「箏爪」に当たるが、「套」と呼ぶようにすっぽり被せてしまう。音量を上げる作用があるが、弦を痛めてしまう恐れもある。

## I 瑟

まず、琴の発達以前に最も重要であったコト類「瑟」の各部位置の数値を報告書から挙げて見よう（単位はすべて cm）。但し、報告書に言及されているもののみで、全ての報告書が詳細に同じ項目のデータを記録していないのであるが、それでも貴重なデータであるから極力載せた。瑟は所謂「楚瑟」で 25 弦、1 首岳、3 尾岳、4 柄を標準とするが、以下は、定型にいたる過程に現れた種々の数値である（因みに、日本の現代標準の箏は全長 160~200 箏幅 30.0 首岳高 1.3 箏柱高 5.6）。

### 湖北省宜昌市当陽曹家崗 5 号春秋晚期墓

①弦孔 21 全長 191.0 首幅 31.0（首岳長と同じ）尾幅 29.7 首岳高 1.0 首岳幅 0.8 弦距 0.8~1.4 外尾岳（6 孔）中尾岳（8 孔）内尾岳（7 孔）柄数 2

②弦孔 26 全長 210.0 首幅 38.0（首岳長と同じ<sup>6)</sup>）首岳高 1.0 首岳幅 1.0 首岳弦距 1.3 尾幅 29.7 弦距 1~1.3 外尾岳長（10 孔）13.1 中尾岳長（8 孔）10.4 内尾岳長（8 孔）12.4 尾岳弦孔 1.0~1.8 尾岳弦距（外）1.0~1.8（中）2.0~2.5（内）3.3~3.5 柄数 3

## 湖北省随州市擂鼓墩曾侯乙战国前期墓

①弦孔 25 全長 167.3 首幅 42.2 尾幅 38.5 两端瑟高 11.1 中央瑟高 13.7 首岳長 43.0<sup>(6)</sup> 首岳高 0.8 首岳幅 0.9 外尾岳長 13.7 (8孔) 幅 0.9 高 0.8 中尾岳長 12.5 (8孔) 幅 0.9 高 0.8 内尾岳長 13.8 (9孔) 幅 0.9 高 0.8 首岳～内外尾岳 141.2 首岳～中尾岳 143.0 孔距 1.4～2.0 柄高 6.5

②弦孔 25 全長 164.3 幅 41.5 两端瑟高 12.0 中央瑟高 13.0 首岳長 43.0 首岳幅 0.9 首岳高 0.6 弦距 1.7 孔径 0.4 外尾岳長 13.6 (9孔) 幅 0.8 高 0.5 中尾岳長 12.6 (8孔) 幅 0.8 高 0.5 内尾岳長 13.2 (8孔) 幅 0.8 高 0.5 首岳～内外尾岳 144.0 首岳～中尾岳 149.3 孔径 0.28～0.5 孔距 1.5～1.8

③弦孔 25 全長 151.0 幅 43.8 瑟高 11.35 首岳長 44.0 幅 0.9 高 0.6 孔径 0.3～0.45 孔距 1.5～1.8 外尾岳長 13.8 (9孔) 中尾岳長 12.6 (7孔) 内尾岳 13.7 (9孔) 幅 0.8～0.9 高 0.5～0.6 孔径 0.3～0.43 孔距 1.5～1.8 首岳～内外尾岳 130.0 首岳～中尾岳 134.0

#瑟柱 3種 木製と骨製がある。全 1,358 枚。一筒 683 枚, 他の一筒 576 枚, 泥中から 98 枚, 棺中から 1 枚。第 1 種は左右対称型。740 枚。竹製の筒に入っている。瑟柱高 1.3～3.0 (但しほとんどが 2.5), 柱足幅 1.8～4.0 第 2 種は非対称型。608 枚 (筒より 601 枚 泥中より 7 枚)。柱高 1.5 2.1 2.3 2.5 などあり。柱足幅 2.7～4.9 足は片足を少し伸ばした形状。第 3 種も非対称型で一足が非常に伸びている。柱高 2.8 柱足幅 5.6 10 枚。後 2 種は瑟縁用の柱。すべて柱頂に弦溝が刻まれている。

## 襄陽蔡坡 12 号春秋末战国中期墓

弦孔? 全長 81.0 幅 40.0 底板厚さ 1.0～1.1

湖北省江陵<sup>(7)</sup>雨台山 354 号战国中期墓 (19 弦, 23 弦, 25 弦の 3 種出土)

①弦孔 25 全長 90.0 幅 36.0 瑟高 4.0 尾岳 (外) 9 孔 (中) 7 孔 (内) 9 孔

②弦孔 23 全長 87.0 幅 31.5 尾岳 (外) 8 孔 (中) 7 孔 (内) 8 孔 柄数 4

③弦孔 19 全長 60.0 幅 32.7 瑟高 8.7 尾岳 (外) 7 孔 (中) 5 孔 (内) 7 孔

## 湖北省江陵雨台山 212 号墓

#「彈套」套長 3.5 幅 2.0 (骨製, 扁円形, 内空)

湖北省江陵天星觀 1 号楚墓 (25 弦 2 張, 24 弦 2 張, 23 弦 1 張)

①弦孔 25 全長 150.0 幅 42.0 瑟高 9.0 首岳長 42.0 首岳幅 1.4 首岳高 0.5 内外尾岳長 14.0 中尾岳長 13.6 尾岳幅尾岳 1.0 尾岳高 0.5

②弦孔 24 全長 171.5 幅 41.0 瑟高 8.5 首岳長 41.0 首岳幅 1.6 首岳高 0.6 内外尾岳長 15.3 中尾岳長 12.5 尾岳高全 0.6 内外尾岳幅 1.0 中尾岳幅 1.2

③弦孔 24 全長 171.5 幅 45.0 瑟高 9.5 首岳長 42.5 首岳幅 1.6 首岳高 0.6 内外尾岳長 15.0 (9孔) 中尾岳長 12.5 (6孔) 内外尾岳幅 1.0 中尾岳幅 1.2 柄数 4

④弦孔 23 全長 172.5 幅 43.5 瑟高 6.5 首岳長 43.5 首岳幅 1.3 首岳高 0.7 内外尾岳長各 14.5 (8孔) 内外尾岳幅 1.0 中尾岳長 15.0 (9孔) 中尾岳幅 1.2

#瑟柱 (木質) 80 枚 柱高 2.0～3.0 柱厚 0.8 柱足幅 3.5～4.3

柱高 3.0 柱足幅 3.5 #「彈套」3 点出土

湖北省江陵馬山磚廠2号楚墓

弦孔25 全長103.0 幅42.0 首岳長約40.0 尾岳長全14.4 内外尾岳(8孔)中尾岳(9孔)

湖北省江陵拍馬山21号戦国中晩期墓

①弦孔24 全長53.0 幅27.0

②弦孔? 全長84.0 幅45.0

湖北省江陵望山1号戦国中期墓

①弦孔25 全長115.0 幅43.0 瑟高9.0

②弦孔23 全長85.7 幅38.0 瑟高5.0

湖北省江陵望山2号戦国中期墓

弦孔25 全長146.0 幅44.5 瑟高9.0

湖北省江陵藤店1号墓

弦孔25 全長134.0 幅44.0 瑟高10.0 (外)8孔(中)8孔(内)9孔 柄数4

湖北省江陵鷄公山488号戦国墓

弦孔25 全長67.0 幅37.5 首岳長37.2 首尾岳高0.7 首尾岳幅0.8 兩端瑟高5.0

中央瑟高6.0 外尾岳長13.7(9孔)中尾岳長10.3(7孔)内尾岳長14.0(9孔)尾岳高(首岳と同じ)首岳~内外尾岳51.5 首岳~中岳53.5 弦距約1.0

湖北省江陵溪峨山7号墓

弦孔25 全長115.0 幅46.0 瑟高11.0 柄4

湖北省荆門包山1号戦国中晩期墓

弦孔21 全長88.0 瑟高5.0 幅44.0 首岳長44.0 孔距2.0 孔径0.2

柄数4 柄高4.5 尾岳長(外)13.0(中)12.0(内)15.0 尾岳各7孔

河南省固始侯古堆1号戦国早期墓

弦孔19 全長192.0 幅37.5 瑟高10.0 尾岳(外)6孔(中)7孔(内)6孔

柄数5 柄高12

河南省信陽長台関1号戦国中期墓

①弦孔25 全長182.0 首尾幅47.5 瑟高11.8 弦距1.9~2.1 孔径0.2

②弦孔21 全長124.0 首尾幅37.0 瑟高6.3 弦距1.7 首岳高0.5 尾岳各7孔

柄数4 #瑟柱数22 瑟柱高0.7~1.1 木製兩足非対称

河南省信陽長台関2号戦国中期墓

①弦孔25 全長185.0 首幅47.0 瑟高7.5 #出土瑟柱数24 うちほとんどが瑟柱高3.2, 柱足幅3.7 下厚さ1.3

②弦孔25 全長134.0 幅45.0 弦距1.7~2.1 孔径0.3~0.5 尾岳(外)9孔(中)7孔(内)9孔

③弦孔25 全長187.0 幅47.0 瑟高13.0 内外尾岳9孔 中尾岳7孔 柄数4

#瑟柱高1.8~3.1 柱足幅3.4~4.4 #瑟枕長36.0 幅8.8

湖南省長沙瀏城橋戦国中期楚墓

弦孔24 全長104.0 幅40.5~42.8 尾岳(外)8孔(中)7孔(内)9孔

**湖南省長沙五里牌戦国中晩期楚墓**

①弦孔 25 全長 94.0 首幅 40.0 瑟高 6.8

②弦孔 24 全長 103.3 首幅 42.0 瑟高 10.0 弦距 1.2~2.4 #瑟内に瑟弦残存

**湖南省長沙馬王堆漢墓**

弦孔 25 全長 116.0 幅 39.5 両端瑟高 8.4 中央瑟高 10.8 首岳高 1.0 首岳幅 1.0 弦距 1.5 内外尾岳隠間 95.2 中尾岳隠間 100.0 内外尾岳長 14.0 中尾岳長 11.0 瑟柱高 2.5 柱足幅 3.5

#以下は（弦径と首岳～柱までの距離）。

外 9 弦：第 1 弦 (0.12 ?) 第 2 弦 (0.12 48.1) 第 3 弦 (0.12 46.8) 第 4 弦 (0.11 35.2) 第 5 弦 (0.1 29.5) 第 6 弦 (0.08 24.5) 第 7 弦 (0.08 24.0) 第 8 弦 (0.07 19.0) 第 9 弦 (0.06 14.5)

中 7 弦：第 10 弦 (0.19 93.6) 第 11 弦 (0.19 81.5) 第 12 弦 (0.17 86.0) 第 13 弦 (0.16 93.1) 第 14 弦 (0.16 93.9) 第 15 弦 (0.15 80.5) 第 16 弦 (0.12 74.5)

内 9 弦：第 17 弦 (0.12 55.0) 第 18 弦 (0.12 48.6) 第 19 弦 (0.10 42.3) 第 20 弦 (0.1 30.8) 第 21 弦 (0.09 24.5) 第 22 弦 (0.08 27.3) 第 23 弦 (0.07 13.8) 第 24 弦 (0.06 11.5) 第 25 弦 (0.05 10.1)

#漢代以前のコト属弦は他に数値の報告がないので極めて重要である。現代中国の箏弦の弦径は 0.023~0.162, 日本の箏弦の弦径は 0.07。

**II 琴（漢代以前の琴は各墓 1 張のみ出土）。**

琴は全体を漆塗りにし柱を立てず、琴面が平面になってからはそこを指板にして押さえたり滑らせたりして一弦から無数の音を出すことを特徴とする。また、漢代以前は共鳴箱と尾部がはっきりと分かれていて、尾部は空洞でないから弦長を伸ばす意図があったことが分かる。琴面は凹凸であったのが徐々に平面になり全体が指板となって、紀元後の琴に発展していく。

**湖北省随州市擂鼓墩曾侯乙戦国前期墓（BC433 年銘文）**

弦孔 10 全長 67.0 首部高 6.5 首部幅 18.7 首部共鳴箱長 41.4 首岳長 16.2 首岳高 1.8 首岳幅 1.6 弦距 1.4 隠間（首岳～龍齧：有効長度）62.7 雁足高 4.5 雁足糸巻部分 2.4 軫高 2.6 軾内径 0.8 軾外径 1.4 #表面が波打っているため指板として使えない。

**湖南省長沙五里牌戦国晩期楚墓**

弦孔 9?（弦孔一部破損）全長 79.5 共鳴箱長 49.0 琴高 5.0 尾部長 30.5 尾部幅 6.4 隠間 74.7 岳・軾ともに出土せず。#琴面が十分に平坦でない。

**湖北省荊門市沙洋区四方郷郭店村 1 号墓（前 4C 中期～3C 初期）1993 年出土**

弦孔 7 全長 82.1 隠間 79.0 共鳴箱長 50.8 同幅 12.4~13.5 首岳長 10.4 首岳幅 0.8 首岳高 0.9 孔距 1.3 孔径 0.3 尾部幅 9.1~6.0 #現存最古の七弦琴で平坦度増加。

**湖南省長沙馬王堆 3 号漢墓（BC168 年頃）**

弦孔 7 全長 82.4 共鳴箱長 50.8 箱高 7.0 尾部長 31.6 首幅 11.5 尾幅 5.2 軾高 1.5 軾径 0.8~1.0 #琴面がほぼ平坦で左指法を使用した擦痕が見られる。

法隆寺所蔵琴 (724年開元12年銘文 四川彭州台)

弦孔7 全長109.8 幅17.0 #箏柱 柱高2.7~3.4 柱足幅4.2~5.1

正倉院所蔵金銀平文琴 (内部に右「乙亥之年」左「季春造作」と墨書する)<sup>(8)</sup>。

弦孔7 全長114.2 琴高2.2~4.5 首幅16.0 首岳長16.0 首岳高1.8 首岳幅0.8

隠間108.4 尾幅13.1 弦距1.8 龍齧長2.5

弦の太さ 0.1283 (纏弦) 0.0861 0.0586 0.0550 0.0550

#軫(角製六角) 高2.6 幅1.1 軫(紫檀六角) 高2.7

#### 現代の標準的琴

弦孔7 全長120 首部幅20.0 首部高3.6 首岳長17.0 首岳高1.5 弦距2.0 弦孔0.4

隠間109.0 尾幅15.0 龍齧高0.2 #軫高4.5 雁足高3.3

\* 湖南省長沙王室墓 (五弦筑と目されているコト属)

弦孔5 全長83.5 岳高0.6 岳幅0.9 隠間66.5 弦距1.8~2.2 孔径0.2

#9柱が同時に発見される。

#### 報告書一覧 (単行本)

- \* 『長沙馬王堆一号漢墓』(文物出版社 1973年 北京)
- \* 『馬王堆漢墓』(文物出版社 1982年 北京)
- \* 『江陵雨台山楚墓』(湖北省荊州地区博物館編 文物出版社 1984年 北京)
- \* 『信陽楚墓』(文物出版社 1986年 北京)
- \* 『中国楽器図志』(輕工業出版社 1987年 北京)
- \* 『曾侯乙墓』(湖北省博物館編 文物出版社 1989年 武漢)
- \* 『包山楚墓』(文物出版社 1991年 北京)
- \* 『中国楽器』(現代出版社 1991年 北京)
- \* 『河南考古四十年』(河南人民出版社 1994年 鄭州)
- \* 李純一著『中国上古出土楽器綜論』(文物出版社 1996年 北京)
- \* 『中国音楽文物大系・湖北卷』(大象出版社 1996年 鄭州)
- \* 『中国音楽文物大系・河南卷』(大象出版社 1996年 鄭州)
- \* 吳釗著『追尋逝去的音楽踪迹』(東方出版社 1999年 北京)
- \* 『正倉院の楽器』(日本經濟新聞社 昭和42年)
- \* 『法隆寺の宝物』(東京国立博物館 平成11年)

#### 報告一覧 (中国雑誌)

- \* 『文物参考資料』
- 「信陽戦国楚墓出土楽器初步調査記」(1958年1期)
- \* 『江漢考古』
- 院文清著「江陵馬山磚廠2号楚墓発掘簡報」(1987年3期)
- \* 『湖南考古輯刊』

- 「長沙市五里牌戦国木椁墓」(1982年第1輯)
- \* 『文物』
- 「湖北省江陵出土虎座鳥架鼓兩座楚墓清理簡報」(1964年9期)
- 「湖北江陵三座楚墓出土大批重要文物」(1966年5期)
- 「湖北省江陵藤店一号墓發掘簡報」(1973年9期)
- 「長沙馬王堆二, 三号漢墓發掘簡報」(1974年7期)
- 「襄陽蔡坡12号墓出土吳王夫差劍等文物」(1976年11期)
- 「揚州邗江胡場漢墓」(1980年3期)
- 「江西貴溪涯墓發掘簡報」(1980年11期)
- 「河南固始侯古堆一号墓發掘簡報」(1981年1期)
- 「荆門市包山楚墓發掘簡報」(1988年5期)
- 「湖北当陽趙巷4号春秋墓發掘簡報」(1990年10期)
- 「荆門郭店一号楚墓」(1997年7期)
- \* 『考古』
- 「湖北江陵拍馬山楚墓發掘簡報」(1973年3期)
- 李純一著「漢瑟和楚瑟調弦の探索」(1974年1期)
- 「江陵溪峨山楚墓」(1984年6期)
- 黄翔鵬著「秦漢相和楽器〈筑〉の首次発現及其意義」(1994年8期)
- \* 『考古学報』
- 「長沙瀏城橋一号墓」(1972年1期)
- 「江陵天星觀一号楚墓」(1982年第1期)
- 趙德祥著「当陽曹家崗5号楚墓」(1988年4期)
- \* 『黄鐘』
- 「曾侯乙墓古楽器研究」(1988年3期)
- \* 『楽器』
- 「長沙出土の戦国琴」(1984年1期)

## 註

1. 『一橋論叢』第126号所収 2001年8月。
2. 項陽など著「五弦筑研究」(『中国音楽学』1994年3期), 項陽など著「五弦箏初研」(『音楽研究』1994年3期)及び文中に挙げた黄翔鵬氏の『考古』1994年8期に載せる筑に関する記述に筑のスティックが同時に出土したと強調している。
3. 『呂氏春秋・古楽』に瑟が5弦→15弦→23弦と増加したとあって, 瑟に増弦の発展過程があったことを述べているが, 出土瑟は同時に出土したものにも数種あって増加過程は確認できない。漢代には『淮南子・齊俗訓』, 『史記・封禪書』等にあるように, すでに25弦と定まっていたようである。
4. 左右両手指弾の画像石が見られる(上掲『長沙馬王堆一号漢墓』上巻)。

5. 桓譚『新論』に「五弦，第一弦為宮，其次商，角，徵，羽，文王，武王各加一弦，少宮，少商」とあり，漢代以前に琴が五弦から，第1弦と第2弦の8度上の2本を増やしたという通念の存在を示している（揚雄『琴清英』にも見られる）。
6. 首岳長が首幅より長いのは，瑟面がアーチ型に膨らんでいるからである。
7. 江陵地区 11カ所の楚墓から計 33 点の戦国時代楚瑟が出土した。
8. 上記法隆寺琴の銘文「開元」からこの「乙亥」を開元 23 年（735 年）とする。

2002 年 7 月 10 日